

自我同一性形成過程に関する一考察 —青年僧侶について—（二）

佐 藤 光 政

はじめに

○現代密教第二号においては、本研究についての総論的部分を述べた。

しかしながら、同一性地位面接における妥当性を述べることにその論の多くをさいしたことから、「わかりにくく」「面接の具体的部分の紹介を」との指摘があった。

そこで、本稿においては、被面接者のうちから仮説的に設けた四つの類型、そして四つの同一性地位について、特徴的な四名の具体的な答えを記述したい。

また、学術的でないとの批判を予想しつつも、なるべく心理学的用語を使用せずに散文的な文章とすることで、多くの教師、その家庭に対しても、自らの問題として考えて戴くことを期待したい。

そうなつてこそ、「伝統的ともいえる社会に育つ青年の自己の役割の受容、自己確立、宗教観、宗教的態度の形成について、環境的要因との関連性を探る」という本研究の意義が理解され得ると信ずるものである。

また、平面的な調査方法を用いずに、面接という立体的、臨床的な方法を用いた目的を達するのではないかと思う。

○四つの型

対象者の関係上そのほとんどが早期完了型となる可能性が高いためマーシャの四つのステイタス以外の下位類型を設ける必要性を感じ仮説的に次の四つの型を設定した。（F型が多いため）

I 生活環境の中で現われたもの（人、事、物）を無理なく取り入れて、自らの核心の一部としている。（I型と呼ぶ）

II 自らが育つ伝統的ともいえる社会の特異性に外部の刺激等により気づいて、内的葛藤が起こり、拒否的に受けとめた時期がある。

① 自らが、苦悩のうちに、独力あるいは様々なきっかけ（人、事件、書物との出会い等）で、自分の役割を積極的、肯定的にとらえ直した。（II-a型と呼ぶ）

② 葛藤がおさまらず、いまだに、自分の役割について、苦悩している（II-b型と呼ぶ）

③ 批判、拒否の意味を深く自らに問うことの苦しさ、ひとまず離れて現実的状況に順応している（II-c型と呼ぶ）

○同一性地位

四つの型の特徴

(1)

I型「生活環境の中で現わされたもの（人、物、事）を無理なく取り入れて、自らの核心の一部としている」型の事例について述べたい。この型の人には、拒否的であった時期がないことが特徴である。

ここで、事例として取りあげるK・S氏は栃木県出身の二二歳の男性であり、四人兄弟（男性ばかり）の長男で仏

表1 Marcia の自我同一性地位

自我同一性地位	危機	傾倒	概略
同一性達成 (Identity Achievement) A型	経験した	している	幼児期からの在り方について確信がなくなりいくつかの可能性について本気で考えた末、自分自身の解決に達して、それに基づいて行動している。
モラトリアム (Moratorium) M型	その最中	しようとしている	いくつかの選択肢について迷っているところで、その不確かさを克服しようと一生懸命努力している。
早期完了 (Foreclosure) F型	経験していない	している	自分の目標と親の目標の間に不協和があり、どんな体験も、幼児期以来の信念を補強するだけになっている。硬さ（融通のきかなさ）が特徴的。
同一性拡散 (Identity Daiffusion) D型	経験していない	していない	危機前 (Pre-crisis) :今までに本当に何者かであった経験がないので、何者かである自分を想像すること不可能。
	経験した	していない	危機後 (Post-crisis) :全てのことが可能だし可能なままにしておかなければならぬ。

教系大学の四年生。両親は健在、祖父母も同一寺院内に寝起きしている。

●導入の⑤の大学を選んだ時期について

「好きな大学（仏教系でなくても）へ進学してもかまわない。但し、その後仏教系大学へ入って、僧侶の資格を取ってくれといわれた。僕自身、寺を継ぐか継がないかにかかわらず、中学校くらいから、この大学へ来るという意識はあった。」

職業の領域の⑦の質問の両親の期待については、

「お坊さんになつて欲しいとか、継いでもらいたいという希望をはつきりと口にするようなことは、（両親は）なかつた。」

これら二つの答えから、早い時期より自分への両親からの期待、すなわち、きわめて柔軟な制約を比較的肯定的にうけとつていい。これには、彼には、男の兄弟が三人あるということも幾分影響していると考えられる。

●職業の③の僧侶になろうと決めた理由の一つについて

「檀家さんに対する責任は放棄できないと感じた。また、そういうシステム的なことだけではなく、仏教の哲学的、思索的なところは自分の性にあつていいので……」

K・S氏は、大学入学前より、地域においての寺院のあり方と、自分の興味ある分野とを結びつけ、僧侶というものについて、積極的価値を見出している。

●職業の領域の④の僧侶となるために大切なことについて

「信仰心だと思います。大学へ来て、一般の人でお坊さんになりたいという友人ができたが、二つのグループに分けられるように思えた。一つは、仏の教えに興味をもつている人、もう一つは、それを一つの資格のように割り

切って考えている人。やはり、前者に共感するし、ともすると後者に流されがちな自分は厳しく律したいと思う。」

大学入学後、周囲を客観的に眺める中で、自分の理想像の模索を始めている。これは、仏教系大学の持つ環境がもたらすとらえ直しの機会ともいえる。

● 価値観の①と宗教の⑦の影響をうけた人々について

「釈尊、宗祖、そして現代思想家の栗本慎一朗氏です」

「いずれの方々も、おしえよりもその人の生き方に引かれますね」

現代思想家と釈尊、宗祖を並列的にとらえ、一人一人を立体的な存在としてとらえている。

● 宗教の①の宗教の意味について

「宗教とは、人間の生きていく中で、肉体的機能のような、根本的に必要不可欠なもの、人間の存在を規定する基本的なものという感じがする」

非常に答えにくい抽象的質問であるにもかかわらず、即座に自分なりの意味を答えていた。これは、彼の心理的傾向が、自分の毎日の経験を、再度自分なりに味わい、意味づけする傾向を持つていてそれを想像させるものである。

● 宗教の②の宗教集団のイメージについて

「私の宗は、多義的なものを包含していくやりがいはある。しかし、今は、宗派、セクトにこだわりすぎたくはない」

肯定・否定の両要素を有している。

● 価値観の⑦の父の生き方についての感想

自我同一性形成課程に関する一考察

「父の場合は、自分なんかよりも、明確に祖父に寺を継ぐように強制されていたのに、変にすねたりすることもなく（寺務について）責任を果たしており、尊敬している」

● 宗教の⑨の父の宗教的信奉について

「父とは、いくらかは話をした。自分のイメージしている僧侶のあり方に近いと思う」

父親の姿に、僧侶としての肯定な像の一部を見ている。

● 値値観の⑧の彼の価値観に対する両親の気持ちについて

「坊さんになることに全く抵抗がなかったので対立したことはない。自分の生き方は認めてくれていると思う」

周囲の状況と自分の興味を早くから、無理なく一致させている。

以上、K・S氏の答えから、良い意味でのI型、すなわち、きわめて自発的、能動的なI型とみなされた。

また、その内容より、K・S氏は、「危機なし、傾倒あり」ということで、三領域ともに早期完了型であるとみなされた。

しかし、内容的には、大学入学後に、それまで、いく分他律的であったものが、自分なりにとらえ直され、宗教、価値観の領域的答えから考えても、自らの考え方を示していることからは、一面、同一性達成の特徴をもあわせて備えていると考えられた。

こういうとらえ直しができたのも、彼の資質によるためであろう。

彼のこうした資質は、どのような環境のうちに熟成されたのであろうか。家族の領域との関連で考えてみたい。

● 父親との関係について

家族の領域の①の良い思い出について

「弟がいじめにあった時、加害者的家族に苦情を言うというような短絡的な解決はせずに、学年全体の父兄が、みんなで納得のいく解決の方法を見つけようという行動をした父は、りっぱだと思った」

家族の④の父をかけがえなく思う時

「離れて住んでわかるのですが、久し振りに寺に帰った時、父は責任ある仕事を万端こなしているなと思う時です」

父について、親としての役割について理想的な姿をみていたが、今度は、僧侶としての役割という視点から、とらえるようになっている。

●家族の⑤の父を一人の人間として意識するきっかけについて

「最近（大学三年頃）になつてですね。自分が修行を終えて帰ってきて、寺の仕事を手伝いするようになつてからですね。ようやく父と同じ土俵に上がつたという感じですね」

青年僧侶にとって、特に一人の人間、男性として父を意識することと、一人の僧侶として意識することとは、多分に同じニュアンスを含んでいるであろう。

価値観の⑦の父の生き方についての答えより、父親を祖父との関係で、息子としての役割において、自分と比べて、父の姿勢を客観的に見て、評価している。

家族の②の父との悪い思い出について

「エピソードは思いつかないが、人に対して自分の意見を頑固に通すことがある時」

具体的なものがこと自体、他の質問に対する鮮明な答えに比して考えても、K・S氏が、父に対して肯定的情感のうちにあることを示している。

●母親との関係について

家族の①の母との良い思い出について

「幼い頃、勉強のことで、叱りつけてやらせるということではなく、一緒に勉強をするという姿勢で夜遅くまでつきあってくれたことなど……」

家族の③の母との関係で自分の取るべき行動について

「最近思うのは、母という存在は、自分を庇護してくれるものではなく、自分自身が庇護しなければならない存在である」と思っている」

良き母としてみていたものが、一人の人間一人の僧侶としての自覚が生まれ始めた頃から母に対する意識の変化を感じるようになつていて。同様の答えは、被験者二〇名中の何名かがしている。これは、前にも指摘したが、程度の差はある、ほとんどの被験者が持つている母親に対する肯定的姿勢から生ずるものである。

家族の②の母についての悪い思い出については

「感情的な問題となりますが、祖父母との感情的問題が生じた時というか、その辺ですね」

同様の答えは、被験者中何名かより指摘された。

以上のことから、彼の父、母に対する姿勢は、幼い頃より終始一貫して、肯定的にとらえられている。

(2) II a型「自らが苦惱のうちに独力あるいは様々なきっかけ（人、事件、書物との出会い等）で自分の役割を積極的、肯定的にとらえ直した」タイプの被験者の事例についてのべたい。

ここで取り上げるM・T氏（仮名）は二九歳で大阪府出身で、姉一人、第二人の長男であり大学（仏教系コース以

外を専攻) 卒業後、大本山にて修行している。

●導入の⑤の大学の選択の時期について

「早く社会に出たかったが、親から大学へ行くように説得された。その時も人間関係学科のようなものがある大学に生きたかたが成績が伴わず、断念した。その後、仏教系大学の文学部を受験し合格した。『人を動かす』という題名の本や、周囲のいきいきと生きている人達を見て、早く自分もそのような人生を見つけたいと思つていた。大学は仏教系ではあったが、四年間は仏教的なものには一切かかわらず、バイトに明けくれ、その中で、何人もの魅力的人間とも出会った。」

●職業の②の職業選択の経緯について

「大学へ入学した時も、僧侶になる気はなかった。しかし、四年間、バイトをする中で卒業の頃より、自分の探し求めている、人との協同で何かをやっていくということは、もうすでに寺の中にあるのではないかと思うようになつた。卒業後、修行は一年間と小さい頃より思つており、そうした。その修行の一年はつらかつたが、自分の気持ちちは、おどろく程、静かで、寺へのイメージも清々しいものとなつた。」

自分の環境に対する意味づけ、僧侶という職業に対するとらえ直しが、M(モラトリアム期)たる大学の四年間を経て行われ、修行の時期を経て確固としたものになっている。このことから、IIa型とみなされる。

●職業の⑥の変更の可能性について

「今は何かやれといわれたら、寺と一緒にできるものであれば良いと答えるだろう」

選択期間を経て、一つの重要な選択を行ない傾倒、積極的関与を僧侶という職業にしている。

●宗教の⑤の宗教について話し合った時以後の変化について

自我同一性形成課程に関する一考察

「修行中に教えられたことの裏づけを知りたいと考えるようになった。もともと好きな実証的なものから、内面的・観念的へも関心が向くようになった。」

修行後、自分の関心の方向が変化していることを語っている。

● 宗教の①の宗教の意味について

「自分の内面を照らすもので、自分を高めていき、自分らしくあるようにしてくれる、一つの指針である」

自分なりの意味づけが行われており、その点からは、A（同一性達成）型といえる。

● 親子間の精神力動

父親については、家族の⑤の一人の人間として意識した時期の中で

「高校の頃、自分の意見が通らず、初めてその存在を感じた」

中学の頃まで、彼にとって、自分の良い理解者と認識していた父が、進路についての話の中で、別の存在として初めて認識した時である。

● 家族の⑦の理解との一致度について

「父は、社会福祉にかかわっており、その職にうち込んでいる。何というか、静かなバイタリティを秘めた人であり、尊敬はしている。ただ、父はどちらかというと、僧侶ということについては、仕方なくなつたという面があり、その点については、自分はそうありたくないと思っている。」

父親については、僧侶というよりも、一人の人間としての生き方という意味から評価している。彼について、興味深いのは、宗派の重鎮たる祖父を、僧侶として高く評価しており、そこに僧侶の理想像を見ている。

母親については、明るい人で、自分たち子供に与えた影響は大きいと述べ、中でも家族の⑤の一人の人間として考

えた時期について

「修行中は、何でも一人でやらなければならず、その時に、母に苦労をかけ、甘えていたなどくづく思った。」以上のことから、両親については、肯定的姿勢があり、そういった点からはI型ともいえ、I型+IIa型とするのが妥当であると考える。

また同一性地位の分類については、モラトリアム期→同一性達成型といえる。これは、本面接調査中では、きわめて少なく、男子の兄弟があり、且つ両親との間に相互の信頼関係が確立しているこの事例のような場合に限られている。

しかしながら、モラトリアム期を過ごすことができるか否かは、宗教や職業において、確固としたものを築く一要因となつていいのではないか。

つまり、自分の将来について、不確かさを克服し、自分らしいものを見つける時期、自分の環境について自分なりの意味を模索できる時期をM・Tは経過してきたととらえることができるのではないかと考えられるのである。

(3) II型「葛藤がおさまらず、いまだに、自分の役割について（否定・肯定の両極にゆれつつ）苦悩している」

ここでは、京都府出身で、仏教系大学院修士課程在学中であり、姉一人、第一人の兄弟を持つT・G氏（二五歳）
—仮名—を取り上げたい。

●導入の④の最終学歴について

「一般大学へ行つたのは、高校の頃まで、寺を好きでなかつたから。初め文学部の哲学科を選んだのは、常識と思われていることが、全然まちがつていたりとすることを指摘するようなダイナミックな世界というイメージを持つ

ていたから。」

● 仏教系大学院へ進んだ理由について

「論文を読んだりして、少し興味が出てきたから」といい、

「人間関係のようなものが入ってきたりして、純粹な学問としてはどうかと思うことも多い。」

思索的な傾向は持っているが、それだけに寺院、僧侶というものについては、懷疑的に受けとめている。

● 宗教の①の宗教の意味について

「宗教という言葉自体よくわからない。自分の中には、仏教徒という部分とアンチ仏教という部分が混在している」

● 職業の①の将来の職業について

「一応は、住職になるということでしょうか」

● 宗教の⑧の自分の宗教信念への疑問について

「こういう疑問を持ちつづけていること 자체自分は精進していないのではないかと思う。玄奘三蔵などは、私の年齢には、こんなことをやっていたと考えたりもする」

宗教という問題を、職業的・現実的なものから離れて、純粹な形で、追求したいとする姿勢が感じられる。自らの内面の深さにかかる実存の問題として受けとめている。

以上のことから、T・G氏はいまだに葛藤の中にいる状況が伺える。

● 両親との間の精神力動について

父との良い思い出——家族の③——について

「全然疑問のなかった小学校時代、旅行したり、キャッチボールをしたこと」

②の悪い思い出について

「大学時代、正面から衝突したこと」

宗教の⑨の父の宗教的態度について

「祖父や父については、自分とは一致しないことが多い」

● 家族の③の自分のとるべき行動について

「祖父は身体も不自由だしやはり老いていく存在ですから、面倒は見ていかなければと思いません」

「宗教的な信念では相入れぬものを感じつつも、情緒的側面においては、いたわりを感じさせる。エリクソンの言う所の、両親、家族との間に、"基本的信頼感"の存在を感じさせている。」

また、母親については、宗教の⑨の宗教的態度のところで

「母が一番、仏教的であるかもしれない。自分が大学で教わった仏教の解説をする時、一番の理解者でもある」

これらのことから、II b型とみなされた。なおII b型は、被験者二〇名中でT・G氏のみであった。

同一性地位については、「仏教に徹底的に絶望しない限りは、仏教徒であることをやめない」という言葉から考えて、宗教については、早期完了型（F型）といえる。

しかし、納得いく答えが出るまで求めていくという姿勢からは、職業については、モラトリアム型（M型）ともいえる。

ここでは、全体評定としてM型とし、副評定としてF型もつけたい。

自我同一性形成課程に関する一考察

(4) IIc型「批判・拒否の意味を深く自らに問うこととの苦しさ、難しさから、ひとまず離れて現実的状況に順応している」タイプの被験者について述べたい。

ここでは、東京都出身で、弟一人妹一人の兄弟を持ち、仏教系大学院に在学中の三三歳、Y・S氏について述べる。Y・S氏は既婚者である。

彼は一般大学からの仏教系大学へ進んでいる。

●拒否の時期、内容

「自分は中学・高校と、日曜のたびに寺務の手伝いをさせられ反発していた。そこで大学は他都市へ行つた」

●受け入れの時期＝家族の④の父親をかけがえなく思う時期について

「父がいてくれて良かつたなと思うのは、最近仏教に学問的興味をおぼえ、そして自分が結婚してからですね。檀信徒への接し方をみて、自分にはとてもああはいかないと思う。」

寺というものを受け入れた時期→価値観の①の影響を受けた人について
「宗祖であり、すぐれた人だとつくづく思う。」

●現実への対応

宗教の⑥の宗教について考えた後のことの中で

「頭の中ではどちら方がかわった。しかし概念上では可能なことが、実際の行動という面から考えると矛盾が多い」

現実に寺の中での自分の活動について

「とにかく、今は、両親が中心にやっていますから。私の思うことを言うと、ぶつかる時もあるが、両親の考えを変えるまではいかない。寺に二人の僧侶はふだんはいらないしね……」

● 今後について

職業の④のその魅力の中で

「儀式的なことだけでは駄目、むしろ、そうしたことをこわしていきたい」

「父の仏教と私の考える仏教とは違う。それは父の生きてきた若い頃と今は違うから。父のやり方については、最近は許せるようになった」

これらのことから、現在は寺の中心的役割を果たす父に敬意を払い、一応、現状を肯定している。そして、自分は、来るべきその日のために、自分の納得する方法で、仏教を求めて、こうとする姿勢が示されている。

● 仏教について

「ずっと暗いものと思っていたけれど、本当は明るく、エネルギーに満ちているものだと思う。」

● 家族の⑧の自分の親としてのあり方について

「やりたいと思うことをやっていく。子供は自分の時と同じように反発するかもしれない。意見はきくがね。自分が父に反発していた頃、母とは通ずるものがあった。今度は、自分の妻がそうなってくれると思う……。」「母は父との仲を補完するものなのかも知れないね」

● 同一性地位について

職業についてはF型、宗教、価値観についても同様であり、全体としてもF型とみなされる。

まとめ

これら四人の面接から理解できるのは、僧侶というものの持つ二面的な性格、すなわち職業的因素（現実的イメージ）と宗教的因素（超越的イメージ）の受容と統合の問題である。

職業、宗教、価値観の領域は、他の職種であれば明確な区分ができるものであるが、僧侶というものの特異性ゆえに、それらは密接に関連しており、青年僧侶の内には、大きな葛藤が生まれるであろう。他の職種で、家業を継いだ五名の男性（二八歳～三〇歳）との面接のうちでは、それらは、当然明確に区分されていた。

親子間の精神力動と宗教的態度の形成についてみると、児童期においては、僧侶たる父を、父としてみとらえて同一化が行われる。青年期に至ると、親としてのみではなく人生の先輩、僧侶としての先輩という観点から見直しが行わられる。

しかしながら、多くの場合、その見直しの結果、それに要する時間等はきわめて限定的強制的といわねばならない。深い自らの実存にふれるような内省力、感受性を持つ青年が、成長して後、僧侶、宗教者としての自覚を確固としたものにできるか否かは、青年自身の資質であると同時に、環境的条件（親子関係等）を必要とする。

これらの事例から、考えうる良好な環境的条件を述べてみる。

父母は、青年たる息子の同一性希求に応えるような具体的なヴィジョン、即ち成熟した生き方を示す必要がある。その際、彼らは、子に対して自らの価値観を強要し、同調することを要求せずに、子たる彼を別の個である同一性の存在として受け入れ、見守り続ける必要がある。これは、親にとつても試練といえ、それを乗りこえることで、自らの

人生もより生彩のあるダイナミックなものとなり、成長するのである。

また、一方で親は、子に対しても柔軟な制約を課することで、次の世代への働きかけを行わなければならない。それにより、青年は、自らの同一性（生きる意味等）を、彼らに問い合わせ返すことができ、自己の思索の幅がひろがり自らのイデオロギー的世界（価値観等）を確立して、自己の世界を発見することができるのである。

この「見守り」と「働きかけ」という一見矛盾にみちたかかわりのバランスこそ、親子間の精神力動そのものといえる。

こういったかかわりの中で、男子の場合、児童期より同一化の対象として重要な存在である父親に関して、人生、僧侶の先輩、一人の人間として受容できるのではないか。

そうした中でこそ、青年僧侶は、これまでの自分の人生を再びとらえ直して、そこを基盤として、現実の親より離脱して、新しい自己を確立できるのではないかと考える。

現代密教第二号二二三頁において指摘した寺院、僧侶が共通的にかかる問題や、心理テストの結果や他の業種との比較等の問題は、別の機会に譲り、ここでは、事例内容の開示に主眼をおき、具体的記述の中から、教師各々の内に問題提起をしたいと思う。

註1 面接内容

〔導入〕

4 「の魅力はどういうところですか。
　　」になつたら、仕事の上での日常生活はどんなだと思いま
　　すか。

- 1 何歳ですか。
2 出身地はどちらですか。

3 家族構成は。

4 御家族の方々の職業と最終学歴は。

5 漠然とでも、この（その）大学へ行こうと考え出したのは
　　いつ頃からですか。他の大学を考慮しましたか。

6 何を専攻しています（いました）か。留年、転科、休学を
　　しましたか。

7 この（その）専攻にしてみてどうですか。どういう所が魅
　　力です（でした）か。

〔職業〕

1 将来（現在）の職業については、どのように考えています
　　か。

2 すぐに専攻を生かすつもりですか（でしたか）。

〔価値観〕

1 尊敬する人、あなたが何らかの影響を受けた人は誰です
　　か。（好きな本や著者ということでも結構です。）
2 あなたにとって、生きていく上で、一番大切だと感じられ
　　ことはどのようなことですか。たとえば生きていく上でこ
　　れだけはしていきたいとか、自分にとって、こういうことが

3 （漠然としている場合は、「どういう領域でどういう種類と尋ね
　　る。特定の職業につくつもりがある時は「職業につくことをど
　　のように考えていますか。」）
4 他のものを考慮しましたか。（どうして考え方を変更したので
　　すか。）

一番大切だと、こういう視点は見失いたくないというよ
なことです。

3 どういうところから、そう感じるようになりましたか。そ
のきっかけは。

4 そういうことが、自分にとって一番大切だということにつ
いて確信が、持てなくなつたことがありますか。いつです
か。なぜですか。どのようにして、それを克服しましたか。

5 その一番大切なことについて、あなたが考えを変えること
があると思いますか。

6 値値観や人生観のことと、人と話し合つたり、論じ合つた
りすることがありますか。その相手は。

7 御両親は、どのような価値観、人生観を持つていらっしや
いますか。それに対して、あなたはどう感じていますか。
8 あなたの価値観、人生観について、御両親はどう感じてい
らっしゃるようですか。それに対して、あなたはどう感じて
いますか。

〔宗教〕

- ① あなたにとって、宗教とは何ですか。（宗教）（仏教）とい
う言葉から、何をイメージしますか。
- ② 何か宗教集団に関係していますか。そのイメージは。
- ③ 初めて、その集団に属する自分を意識したのはいつ頃です
か。
- ④ それ依然の自分とそれ以後の自分の行動・考え方・生活に

変化がありましたか。（行動や自己規制の程度等々）

⑤ ③以外で、宗教について、よく考えた時期や人と話し合つ
た時期がありますか。いつ頃、そのきっかけは。その時、宗
教集団、宗教についてどう考えましたか。

⑥ それ以前とそれ以後では、どこか、自分の行動や考え方、
生活に変化がありましたか？

⑦ 宗教的に、あなたが、何らかの影響を受けた人はいます
か。好きな本や著者でも結構です。どのような点ですか。

⑧ 自分の宗教信念（信条）に疑問をもつたことがあります
か。いつ頃、そのきっかけは。どんなことを考えましたか。
その疑問は解決されましたか。解決したとすれば、どう解決
しましたか。

⑨ 家族の方々の宗教に対する態度、考え方はどうですか。そ
れに対してあなたはどう思いますか。

⑩ 宗教についてのあなたの考え方に対する、家族の方々はど
う感じていらっしゃいますか。

〔家族〕

- ① 父親（母親）との思い出の中で自分にとって一番良い意味
で印象に残っていることは何ですか。それは、いつ頃のこと
ですか。
- ② 父親（母親）との思い出の中で、一番悪い意味で印象に
残っていることは何ですか。それはいつ頃のことですか。
- ③ 父親（母親）との関係において、自分はどうあるべきだと

思いますが。実際には、どのようにあるまつてきましたか。

そのような自分について、どのように思いますか。良い点、

悪い点など具体的にあげてください。

④ 父親（母親）をかけがえなく思うのは、どんな時、どんな

こと（役割、あり方）でしょうか。

⑤ 父親（母親）を一人の人間（男性・女性）として、初めて

意識してのは、いつ頃ですか。どう感じましたか。（考えた

ことのない場合は、どう感じますか）

⑥ あなたにとっての理想の父親（母親）像とは。（家庭での

役割、性格的等）

⑦ あなたの父親（母親）は理想との位一致していますか。

（①非常に一致している ②だいたい一致している ③どちらかといふと一致している ④どちらともいえない ⑤どちらかといふと違う ⑥かなり違う ⑦全く違う）①～⑦の内

より選んで下さい。

⑧ 親としての自分の姿を想像したことがありますか。いつ頃

ですか。どんなことを考えましたか。すでに結婚し、あるいは、その後子供がいる場合は自分は親として、どういう親になろう、なると思いますか。

以上が直接の標準形式である。

註2 四つの型の印象

四つの型について

〔結果〕

I型12名、I+IIa型5名、IIb型1名、I+IIa→IIc

型1名、I+IIc型1名であった。

四つの型の印象について

I型十という複合型II青年は意識的、無意識的に周囲のものを自らのうちに、取捨選択しつつ取り入れていく。それを全面拒否することは、主体の存在をも危うくするものであり、時として病理的なものへ進む危険性すら帯びる。むしろ、人は混乱と動搖の時期を自分の内にあるものを受容し、それを基盤として乗りこえていくことが望ましいといえる。

IIa型IIこの型の人間は、比較的明確な発言、考え方をする。自信を外面向いて前に出す人、内に秘める人、各々の傾向はあるが、共通しているのは、存在感を感じさせる人が多い。しかし、反面、独善的傾向も伺える人もいた。

IIb型II物事についての正邪の弁別に厳格である。きわめて強い自己拡張欲、豊かな感受性を感じさせる。混乱と動搖が人一番強くいろいろな意味で障害に直面する確率が高い。

II c型 IIこの型については、当初、冷笑的態度をもつて物事にあたるという傾向を予想していたが、そうした者はいなかつた。（当方の被面接者に課した条件の影響か？）

（I+II a→II c）という複合型があり、自分が将来、寺院において中心的役割を果たす時に備えて、自ら良しとする方向へ知識、技術の習得、研鑽に、その「控え」の時間をあてているといつた人がいた。

時には、現状に対して“割り切った”考え方をして、一面、自らの内面を深く掘り下げるとはしない傾向も伺えた。